

2633
2751

第三十四章 日御子の哀しみ、そして死

素戔鳴尊の上洛

それは、正始六年（二四五）末、あるいは
正始七年（二四六）初春ころであつたろうか。
〔正始六年に〕洛陽へ旅立つてゐた難斗米
（中臣）はまだ帰つてゐない。
そんな時、長い間燻り続けてゐた日御子

及び月読尊と、素戔鳴尊との間に、い
よいよもつて埋めようのない大きな溝が出来

てしまった。

素戔鳴尊は、八握鬚髯を揺すり下り、

めいて怒り狂い、青山を枯山に変すほど、

た。（記・紀）（草木の枯れた山）

いきに阿姉に申し上げて、御裁断を

あおぐことにしよう。

素戔鳴尊はこう言つと、蜿蜒と連なる大

軍を率ゐて、天に参昇つてゐた。山川はこ

記(里)44~46^P 紀上102^P 88^P 1~3行、本行 2,176^P-1/2
記(里)44^P 88^P 1~3行、本行 2,176^P-1/2

2633 2751

紀上103末
紀小72 (記) 45

「その」25

紀上104 3行
紀上104 (記) 45

2.176^{P-2/2}

梯所のことは
「吾が弟の来ることは」とある

とこ^{とよ}と動き、国土^{こくち}は震えた。(記)
天照大神は、素より其の神が暴々しいこと
を知^しつておられたか、――猛然^{もつぜん}と天に参上^{まじりあ}する
様子^{ようす}をお聞きになるに及んで、たいそうび
っくりさへ、
「素戔鳴尊が上^{のぼ}つて来るのは忠誠心ゆえで
はあるまい。この邪馬台国を奪おうと思つて
いるのだらう。――
おのおのその境を分けて領分を決めたという
のに、なせ就くべき国を棄て置いて、敢えて
此^この處を窺^{うかが}うのか」
と仰^{おほ}せられた。(記) 神代紀(上)第六段本文参
照
――
やかて、素戔鳴尊の軍勢は、北の方から
統^と統^ととやって来て、都に迫^{せま}つた。
天照大神は、
へ私は、都を宇らなければならぬ。吾が男弟^{おと}
素戔鳴尊に我が国をまかせてよいものではな
い。
とお思ひになつた。

く不要
といふ

紀上104^P

2,177^P

紀上104^P

うて(611) 月 小鉢803

紀上104⁵⁹

新 志 2116^P 紀上104^P

小鉢1090^P 紀上104^P

ここに、天照大神は戦いの準備に取りか
られた。

天照大神は、まず、髪を結んで髻になし、
裳のすそを縛って袴にしたて、八坂瓊の五百

箇の御統(大きな玉をたくさん連ねた連珠の
飾り)を髻や髪(髪飾り)や腕にまきつけ、

また、背には千箭の鞆と百五箭の鞆(たくさ
ん矢の入った矢入れの道具)を負い、腕には

綾威の高鞆(神聖な力のある高い音を立てる
鞆。弓を射る際、左の臂にはめる革の道具)

堅い土地(弓の上下の端)を装着し、弓をふりたて、剣の柄を握り、

ぼり、堅庭を踏んで股までめりこむほど力強
く、こを陥き、炎雪をふきとばすように蹴散

らかし、綾威の雄詰の声をあげ、綾威の嘖
(責めなほること)の声をあげ、素戔鳴尊に

対し面と向かってなほり問われた。
すると、素戔鳴尊は答えて、

「私には、この邪馬台国を奪おうなどとい
う邪心はありません。」

「とはいえ、姉上
や、兄上の領有域に比べると、私の所領は
範囲

あまりにも小さきように思われます。そ
うではありませんか。もともと、力づくで領
土を拡大することは倭国の為になりますまい。
そこで、姉上の御判断をあおぐうと思ひ、雲
や霧を跋渉して、遠路はるばる参上した次第
です。それなのに、姉上は、私の言ひ分を聞
こうともなさらないのですね。阿姉は、
そんなにまでも起厳顔っておいでたとは思
つても、いけません。で、した。
と仰せられた。へ神代紀(上)第六段本文参照)
だか、天照大神は、素戔鳴尊が勇悍くして
安忍(残忍)なる一面があり、また性悪く
て、残い傷る所多いことを知っておられたの
で、邪馬台国の都の内には、素戔鳴尊を一步
たりともお入れにならなかった。(神代紀、
第五段、本文、一書第二参照)
こうして、天照大神と素戔鳴尊との対立が
続いていた。

*

ひとりみ 元 愛す 元 34P
み身 188P

20

2.179P-1/2

つう 元 1504P
み

2.171P-1/3 梯儀の石

ひのみこ
日御子の歎き

ひのみこ
日御子と素文鳥命とが対峙して争っている

ちうと
丁度その頃、難斗米が帰朝した。

まことに申し上げるのも辛いのでござ

いますか、――梯儀殿は、すでにおそくな

りになつておろしました

難斗米の帰還を待ちわびていた女王日御子に

な思ひで語った。

二代目の神功皇后(女王日御子)は、表向

き独身を通さなければならなかった。そんな

規律の中にあって、――愛する(ことをか

ろうとして許されたたった一人の男、それが梯

儀であった。おそくなり

最愛の人、梯儀様がなつてしまわれた

と難斗米から聞き知った邪馬台国の女

王の悲しみは、いかばかりであつたらう

か。

だから決して匣の蓋を取らないで下さい

20

2,179^P-3/2

石②-38^P (果つ) 石1795^P 西海紀上336^P 1/1
海北 一海を隔てた^P ②152-3/3

と御願ひ申上げましたのくに、
日御子は、大海のかなたの遠い異国
絶え、燈火などが消え入るようには
たすら想ひ忍び、他になす術も知らず、
へ万巻九一七四の等参照
い、くら歎いたとて帰ってこない人を、
慕い、狂おしく涙するその姿は、
哀れであつた

*

あれほど

卑彌呼の死

それは、正始八年(二四七)ある

いは正始九年(二四八)のことであつたらうか。

日御子(第二代目の神功皇后)はおそくな

りになつた。

魏志倭人伝に、

「卑彌呼以つて死す。大いに冢を作る。径

百餘歩。云々」

唐代の李延壽(生没不詳)によつて撰せら

れた北史(二十四史の一。北朝の魏・齊

・周・隋の歴史を一つにまとめたもの。一〇

巻)に、

「正始中、卑彌呼死す」

とある。

正始は魏の齊王芳の年号(二四〇―二

四八)である。

北史のこの「正始中、卑彌呼死す」という記

事が、もし確実な記録にもとづくものであ

①1.914^P 日本文庫 235^P 捏造 172^P 2.182^P
ねつぞう
捏造 172^P
ねつぞう
捏造 172^P

三国史記 三〇史記 223^P 紀小 77^P 下
E-120^P 小林 幸の 98^P 嘉平 126^P 794^P 2.165^P
右に ①1390^P ②1914^P 2.3/4

照 正始九年（二四八）
王國の出現し小林行雄、文英堂、三〇二頁参
れは、卑彌呼の死は正始八年（二四七）か、
正始九年（二四八）
（たことになる。）
（女
尚、翌年の正始十年（二四九）は、四月に
嘉平と改元される。（「三国志」魏書、
齊王紀、嘉平元年四月八日条参照）
＊
どろりとして、唐代の書である「北史」に
「魏志倭人伝」ははじめとする諸
史料にも見られない重要な内容が掲載されて
いるのだうか。
・唐代の李延壽が、勝手に捏造したのだうか。
か。
・いや、あるいは、魚豢の「魏略」が、
「唐書」に「唐書」に「唐書」に「唐書」に
も存在していたことを示しているのかも知れ
ない。（第二十八章「見聞録」の項において
既述）
＊

紀上 88 2 行
紀上 96
④ H. 11. 13 日
天つぎ改行 改行

2,183^P

紀上 790^P
狗は狗に耐 紀上 53
④ 2188^P 1/2 9~10 行

男王立つ

魏志倭人伝に、

卑彌呼以つて死す。大いに冢を作る。徑

百餘歩、徇葬する者、奴婢百餘人。更に男王

を立ても、國中服せず。更相誅殺し、当

時千餘人を殺す。云々

とある。

卑彌呼が死んだとき、——邪馬台国の王と

なつたのは、それはいうまでもなく、素戔鳴

尊だつたのであろう。

尚、素戔鳴尊が王位についた、——ということを暗示し

てゐる記事が、日本書紀に二箇所見られる。

① 天照大神は、以て高天原を治すべし。月

讀尊は、以て滄海原の潮の八百重を治すべし。

素戔鳴尊は、以て天下を治すべし。——(神代紀上

第五段一書第八(天照)

② 其の父母の二の神、素戔鳴尊に勅したま

2,184^P

こと

はく、^{いまい}女、^{はなは}甚だ無道し。^{あづきな}以て^{あめのいた}宇宙に君臨た
る^{おこと}べからず。固に當に遠く^{ねのくに}根国（今の難波あ
たり^{つひ}の^{やう}）であらうに通^かね^な行^ゆのたまひて
遂に逐^{やう}ひきし（神代紀上第五段、本文）
と記載されてゐる。
■恐らく、
素戔嗚尊は、一時^{いちじ}天下^{あめのいた}（宇宙）を治
めたが、その無道な所業故に^{あめのいた}宇宙に君臨た
るべからずとされ、倭国（九州）から追放さ
れ^はた^た宣告^{せんこく}された。
と、
一か、その後、
素戔嗚尊は、^{すさのきのみこと}母^{はは}の^{ねのくに}根国^{ねのくに}（当初の出雲^{いづもの}）
国^{くに}下^{くだ}現在の近畿地方の難波を中心とする一
帯に到り、この地^{あめのいた}天下^{あめのいた}を支配するこ
とになる。
と観察される。
*詳細については、追々追々述べてゆきたい。

米

たいごう

こと

①

$\Phi 2362^{\circ} - \frac{1}{2}$
 H, P, T 100, 105^r
 + 3

$$+3$$

目次

① 698⁹ 7/12 地区

④ 2,192' 写真

マロ塔城 ④ 698' - 1/2

2,186'

「小町」104' 下

改行

馬道地図

ら、その径百余歩の塚を造るのだった。
* もっとも、径百余歩が、底面の直径を示しているのか、
一点から対向位置まで墳丘上を歩いた長さについて述べてい
るのかははっきりしない。
④ では、卑彌呼の径百余歩の塚は、どこに作ら
うかたのだろうか。
④ いうまでもなく、一般常識的には到底首肯
し難いものので、
④ いては、
「卑彌呼（二代目の神功皇后）の径百余歩
の塚は、大倭国（肥後国）の合志原の
都の外郭城内、西北隅に位置している。日横
山（一五一）の頂上に作られた。
と仮定して話をすすめてゆきたい。（第13図）
第193図へ横山周回地図参照）
④ 小丘、横山の山頂は、二つの腕を伏せた
ような形である。姓婦の腹部と腰部とを
表わしているのではなかろうか。
* ④ 双方共、まるく盛り上げたかのような
外観である。
* 東側の山頂には、小さな祠が祀られている。

2.187^P

横山の北側にも削られたか H17. 3. 16日 千紙のところに書いてある。
 どうかについて尋ねたい。 山東小学校にたしを 破 忍 すること!
 の植木

横山頂上の二上山の北側一帯全面が、
 かなりの急勾配になっていて、1かも上から
 下まで傾斜角度がほぼ一定だから、1、不自
 然な感があり、人為性を思わせる。
 ・この急坂の下に「山東小学校」の校庭が
 見える。
 ・もし、かいたら、何時か不明なから
 横山の北側部分を、削り取ったのでは
 なからうか✓
 などと想像さえるが、詳細は不明な
 分

木

起伏の少ない

2,189P

秋葉神社

こと

ろうか。

・そして又、家の中において、西北の隅は

清浄な場所であるとし、神棚を設けるのに

最もふさわしいところと考えられたのかも知

水ない。

・なお、

(イ) 稲藪神社は、稲藪内に祭る神のことであ

り、稲藪・八幡・熊野・神明(天照大神)など

秋葉(火難)の神などか多い(「広

辞苑」へ「稲藪神社」参照)

(ロ) 邸宅を守護し、一家の繁栄と家族の安寧

に建てる東南(辰巳)向きは大吉、西北(戌亥)

西北(乾)は、神仏を祀るに大吉

とされる(昭和五十二年神宮寶曆「神宮館」

二一四二一六頁。他参照)

(ハ) 室の西北の隅は、屋漏と称され、も

つとも人目につかない場所の意であり、詩

経に、

君子不侮于屋漏

「ト」で出ます。干と違ふ。

600年
 -248
 352年

710 平城遷都
 -248
 462

2,190^P

135 G M 1

平城宮の西北方の地に、神功皇后の御陵

表参照

四百年はかりの年月が流れたころ、聖徳太子

神功皇后の御陵も畿内へ移

正始九年（二四八）頃、卑彌呼（二代目の

神功皇后の御陵も畿内へ移

平城宮の西北方日佐紀の

漢和辞典「小林信明」「小学館

へ君子へ屋漏（参照）

一人で行く、良心に恥じるような行動

徳のある人は人の見ていない奥の部屋

漢和辞典「小林信明」「小学館

へ君子へ屋漏（参照）

平城宮の西北方日佐紀の

神功皇后の御陵

表参照

四百年はかりの年月が流れたころ、聖徳太子

神功皇后の御陵も畿内へ移

正始九年（二四八）頃、卑彌呼（二代目の

神功皇后の御陵も畿内へ移

平城宮の西北方日佐紀の

漢和辞典「小林信明」「小学館

へ君子へ屋漏（参照）

一人で行く、良心に恥じるような行動

徳のある人は人の見ていない奥の部屋

漢和辞典「小林信明」「小学館

へ君子へ屋漏（参照）

2,194 P- 2/13

神功皇后陵 2,982¹/₂ 上巻

コピー
⑤ 2215¹/₂ 有3

⑤ 229¹/₂ 右頁の裏に
新内蔵寺 有

⑤ 2215¹/₂
おかめ・ひょうと・和合図

・カラー
・右頁の上半分は
掲載下す。



1369 1469 写真図版 371 神功皇后陵 (五社神古墳)

『朝日新聞』平成23年1月7日付〈初めての立ち入り調査〉参照
506

やまと ⑤ 2362^P 橋のこゑ ⑤ 5372^P 2,192^P
 「小町」 ⑤ 5696^P 小町宮

カー

左頁の右上(1/4頁)に掲載下あり。



372

1409

写真図版 372 横山の二上の山頂

1209 (西北の山頂から東南の山頂部を望む)

1109 著者撮影

⑤ 3059² 14 末

コクヨ ケー20 20×20
 漆河の興科宮は岡村村へ移れ、... それより岡村に祀られていた 豊神の方霊が 箱神社内へ移されたのか?

小野小町 (246) 104, 111, 296^P
 546 2193^P 由 5372^P 5380^P 5386^P 小野小町 (約) 2, 193^P
 112^P 下 11^P 21^P 22^P 23^P 24^P 25^P 26^P 27^P 28^P 29^P 30^P 31^P 32^P 33^P 34^P 35^P 36^P 37^P 38^P 39^P 40^P 41^P 42^P 43^P 44^P 45^P 46^P 47^P 48^P 49^P 50^P 51^P 52^P 53^P 54^P 55^P 56^P 57^P 58^P 59^P 60^P 61^P 62^P 63^P 64^P 65^P 66^P 67^P 68^P 69^P 70^P 71^P 72^P 73^P 74^P 75^P 76^P 77^P 78^P 79^P 80^P 81^P 82^P 83^P 84^P 85^P 86^P 87^P 88^P 89^P 90^P 91^P 92^P 93^P 94^P 95^P 96^P 97^P 98^P 99^P 100^P 101^P 102^P 103^P 104^P 105^P 106^P 107^P 108^P 109^P 110^P 111^P 112^P 113^P 114^P 115^P 116^P 117^P 118^P 119^P 120^P 121^P 122^P 123^P 124^P 125^P 126^P 127^P 128^P 129^P 130^P 131^P 132^P 133^P 134^P 135^P 136^P 137^P 138^P 139^P 140^P 141^P 142^P 143^P 144^P 145^P 146^P 147^P 148^P 149^P 150^P 151^P 152^P 153^P 154^P 155^P 156^P 157^P 158^P 159^P 160^P 161^P 162^P 163^P 164^P 165^P 166^P 167^P 168^P 169^P 170^P 171^P 172^P 173^P 174^P 175^P 176^P 177^P 178^P 179^P 180^P 181^P 182^P 183^P 184^P 185^P 186^P 187^P 188^P 189^P 190^P 191^P 192^P 193^P 194^P 195^P 196^P 197^P 198^P 199^P 200^P 201^P 202^P 203^P 204^P 205^P 206^P 207^P 208^P 209^P 210^P 211^P 212^P 213^P 214^P 215^P 216^P 217^P 218^P 219^P 220^P 221^P 222^P 223^P 224^P 225^P 226^P 227^P 228^P 229^P 230^P 231^P 232^P 233^P 234^P 235^P 236^P 237^P 238^P 239^P 240^P 241^P 242^P 243^P 244^P 245^P 246^P 247^P 248^P 249^P 250^P 251^P 252^P 253^P 254^P 255^P 256^P 257^P 258^P 259^P 260^P 261^P 262^P 263^P 264^P 265^P 266^P 267^P 268^P 269^P 270^P 271^P 272^P 273^P 274^P 275^P 276^P 277^P 278^P 279^P 280^P 281^P 282^P 283^P 284^P 285^P 286^P 287^P 288^P 289^P 290^P 291^P 292^P 293^P 294^P 295^P 296^P 297^P 298^P 299^P 300^P 301^P 302^P 303^P 304^P 305^P 306^P 307^P 308^P 309^P 310^P 311^P 312^P 313^P 314^P 315^P 316^P 317^P 318^P 319^P 320^P 321^P 322^P 323^P 324^P 325^P 326^P 327^P 328^P 329^P 330^P 331^P 332^P 333^P 334^P 335^P 336^P 337^P 338^P 339^P 340^P 341^P 342^P 343^P 344^P 345^P 346^P 347^P 348^P 349^P 350^P 351^P 352^P 353^P 354^P 355^P 356^P 357^P 358^P 359^P 360^P 361^P 362^P 363^P 364^P 365^P 366^P 367^P 368^P 369^P 370^P 371^P 372^P 373^P 374^P 375^P 376^P 377^P 378^P 379^P 380^P 381^P 382^P 383^P 384^P 385^P 386^P 387^P 388^P 389^P 390^P 391^P 392^P 393^P 394^P 395^P 396^P 397^P 398^P 399^P 400^P 401^P 402^P 403^P 404^P 405^P 406^P 407^P 408^P 409^P 410^P 411^P 412^P 413^P 414^P 415^P 416^P 417^P 418^P 419^P 420^P 421^P 422^P 423^P 424^P 425^P 426^P 427^P 428^P 429^P 430^P 431^P 432^P 433^P 434^P 435^P 436^P 437^P 438^P 439^P 440^P 441^P 442^P 443^P 444^P 445^P 446^P 447^P 448^P 449^P 450^P 451^P 452^P 453^P 454^P 455^P 456^P 457^P 458^P 459^P 460^P 461^P 462^P 463^P 464^P 465^P 466^P 467^P 468^P 469^P 470^P 471^P 472^P 473^P 474^P 475^P 476^P 477^P 478^P 479^P 480^P 481^P 482^P 483^P 484^P 485^P 486^P 487^P 488^P 489^P 490^P 491^P 492^P 493^P 494^P 495^P 496^P 497^P 498^P 499^P 500^P 501^P 502^P 503^P 504^P 505^P 506^P 507^P 508^P 509^P 510^P 511^P 512^P 513^P 514^P 515^P 516^P 517^P 518^P 519^P 520^P 521^P 522^P 523^P 524^P 525^P 526^P 527^P 528^P 529^P 530^P 531^P 532^P 533^P 534^P 535^P 536^P 537^P 538^P 539^P 540^P 541^P 542^P 543^P 544^P 545^P 546^P 547^P 548^P 549^P 550^P 551^P 552^P 553^P 554^P 555^P 556^P 557^P 558^P 559^P 560^P 561^P 562^P 563^P 564^P 565^P 566^P 567^P 568^P 569^P 570^P 571^P 572^P 573^P 574^P 575^P 576^P 577^P 578^P 579^P 580^P 581^P 582^P 583^P 584^P 585^P 586^P 587^P 588^P 589^P 590^P 591^P 592^P 593^P 594^P 595^P 596^P 597^P 598^P 599^P 600^P 601^P 602^P 603^P 604^P 605^P 606^P 607^P 608^P 609^P 610^P 611^P 612^P 613^P 614^P 615^P 616^P 617^P 618^P 619^P 620^P 621^P 622^P 623^P 624^P 625^P 626^P 627^P 628^P 629^P 630^P 631^P 632^P 633^P 634^P 635^P 636^P 637^P 638^P 639^P 640^P 641^P 642^P 643^P 644^P 645^P 646^P 647^P 648^P 649^P 650^P 651^P 652^P 653^P 654^P 655^P 656^P 657^P 658^P 659^P 660^P 661^P 662^P 663^P 664^P 665^P 666^P 667^P 668^P 669^P 670^P 671^P 672^P 673^P 674^P 675^P 676^P 677^P 678^P 679^P 680^P 681^P 682^P 683^P 684^P 685^P 686^P 687^P 688^P 689^P 690^P 691^P 692^P 693^P 694^P 695^P 696^P 697^P 698^P 699^P 700^P 701^P 702^P 703^P 704^P 705^P 706^P 707^P 708^P 709^P 710^P 711^P 712^P 713^P 714^P 715^P 716^P 717^P 718^P 719^P 720^P 721^P 722^P 723^P 724^P 725^P 726^P 727^P 728^P 729^P 730^P 731^P 732^P 733^P 734^P 735^P 736^P 737^P 738^P 739^P 740^P 741^P 742^P 743^P 744^P 745^P 746^P 747^P 748^P 749^P 750^P 751^P 752^P 753^P 754^P 755^P 756^P 757^P 758^P 759^P 760^P 761^P 762^P 763^P 764^P 765^P 766^P 767^P 768^P 769^P 770^P 771^P 772^P 773^P 774^P 775^P 776^P 777^P 778^P 779^P 780^P 781^P 782^P 783^P 784^P 785^P 786^P 787^P 788^P 789^P 790^P 791^P 792^P 793^P 794^P 795^P 796^P 797^P 798^P 799^P 800^P 801^P 802^P 803^P 804^P 805^P 806^P 807^P 808^P 809^P 810^P 811^P 812^P 813^P 814^P 815^P 816^P 817^P 818^P 819^P 820^P 821^P 822^P 823^P 824^P 825^P 826^P 827^P 828^P 829^P 830^P 831^P 832^P 833^P 834^P 835^P 836^P 837^P 838^P 839^P 840^P 841^P 842^P 843^P 844^P 845^P 846^P 847^P 848^P 849^P 850^P 851^P 852^P 853^P 854^P 855^P 856^P 857^P 858^P 859^P 860^P 861^P 862^P 863^P 864^P 865^P 866^P 867^P 868^P 869^P 870^P 871^P 872^P 873^P 874^P 875^P 876^P 877^P 878^P 879^P 880^P 881^P 882^P 883^P 884^P 885^P 886^P 887^P 888^P 889^P 890^P 891^P 892^P 893^P 894^P 895^P 896^P 897^P 898^P 899^P 900^P 901^P 902^P 903^P 904^P 905^P 906^P 907^P 908^P 909^P 910^P 911^P 912^P 913^P 914^P 915^P 916^P 917^P 918^P 919^P 920^P 921^P 922^P 923^P 924^P 925^P 926^P 927^P 928^P 929^P 930^P 931^P 932^P 933^P 934^P 935^P 936^P 937^P 938^P 939^P 940^P 941^P 942^P 943^P 944^P 945^P 946^P 947^P 948^P 949^P 950^P 951^P 952^P 953^P 954^P 955^P 956^P 957^P 958^P 959^P 960^P 961^P 962^P 963^P 964^P 965^P 966^P 967^P 968^P 969^P 970^P 971^P 972^P 973^P 974^P 975^P 976^P 977^P 978^P 979^P 980^P 981^P 982^P 983^P 984^P 985^P 986^P 987^P 988^P 989^P 990^P 991^P 992^P 993^P 994^P 995^P 996^P 997^P 998^P 999^P 1000^P

丘に、神功皇后の御陵が築造されたのたろう
 と推察される。
 ・すなわち、
 へ平城宮から見て西北方に造られた神功
 皇后陵に相当するのには、
 合志原の孤立丘、横山の山頂に、
 並らび立っている二上山である。
 と、この物語では考えてみたい。(巻頭の第
 13図。写真図版371。372参照)
 邪馬台国の古京の西北隅に位置すると思わ
 れるその小丘、横山の麓には、指定村社
 七国神社がある。
 (イ) この神社の社伝によると、ずいぶん後年の
 ことなから、先ず、嵯峨天皇の孝仁(弘仁
 十四年(八二三)に、
 天照皇大神、田心姫神、
 鵜萱草耳不合神、神武天皇
 の四柱の神が勧請され、祭神として祀られた

国の合志原へ流さ水てきたものと思われる。

④ 父小野篁が隠岐島へ流さ小野篁の次男・良実(肥後)は

十五年後のよう

③ 弘仁十四年(八二三)に、天照皇

② 一か、人の情として、本来の卑彌呼の場

① 倭国の女王卑彌呼(神功皇后)の場は平

城宮の西北方に佐紀の丘へ遷された。(日御子)

霊は、邪馬台国の宮城の西北方に位置する横山から大和国

・父の物語では、概略、次のように解釈した

という。(七国神社)本殿の額へ由緒書きを参考

(八四〇)三月終に帰洛の勅命を蒙った

を起し、七ヶ所の霊社を合せ祭り、承和七年

の良実(は、)讒者の非義を憤り、無量の祈誓

の爲め罪を得、当小野の里へ流さ水てきた。

小野の父が讒者(あゝさまに告げ口する人

ハ四ハ)に、小野皇朝臣の子・良実(小野

仁明天皇の承和年間(八三四)

仁明天皇の承和年間(八三四)

仁明天皇の承和年間(八三四)

仁明天皇の承和年間(八三四)

仁明天皇の承和年間(八三四)

仁明天皇の承和年間(八三四)

2.194^P-3/2

2194^P
-1/2カ

5369^P

5372^P

ト 小鉢? 171?

⑤ 小野篁の子・良実よしざねは、讒者ざんしやの爲ための罪つみを得え、
ととなり、当小野の里に誦居たぐきよの罪を受け、
遠くへ流ながされる場所ばしよをトまづ（うらない）し、配在はいざい
島流ししまながしし、無量の所望むりやうのしよぼうを起おこして、
たれと思おもい、到いたったのであろう。
⑥ それに、何と早くも、父小野篁は、承和七年
（八四〇）二月十四日に都へ召めされた。
⑦ こうしたわけで、その直後の承和七年三月
に、良実も帰洛きやうらくの勅命ちくめいを蒙こうむった、
と推察すいさされる。
（八四〇）

*

*詳細しゆじゆについては、第九十四章において考察
した。

（あしさまに告つげ口くちをする人）

あまの
天璽 27^P

合志原の外郭城（西北隅角部の小山）山頂に

二つの椀を伏せて並らべたような二上の塚（径

百余歩の塚）が、次第に形作られていった。

そしてやがて、大空のなかに浮かび上がった。

その間、都の内はただしんと静まり返って

いた。涙をふり払って見上げると、山の上には、

白い千切氷雲が一つ、去り難げに漂っていた。

なお、山頂部を削り、形を整えていったも

のならば、土盛りするよりもずつと容

易に山陵を築くことが出来たであろう、と

思われる。

こうしてついに、径百余歩の塚は、その形

において完成の時を迎えた。

けれども、今は未だ、その塚はただの土塊

でしかなかった。

この土の丘に、生命を注ぎ込まなければ

146

④2199
「石室」170
「穴式古墳」

「穴式古墳」123
「横穴式古墳」187
まぼろしの邪馬台国
237, 128頁

元
「元」1198

2, 196^P

1字下げる
1字下げる

ならないのである。

*

（^{たてあな}）^{せきしつ} 竪穴式石室をもつ古墳

とところで、^{けい}径百余歩の卑彌呼の塚は、^{たて}竪

穴式古墳^{あな}だったのだろうか。それとも^{よこ}横

穴式古墳^{あな}だったのだろうか。^{よこあな}横穴式石室をもつ古墳

（^こ）^ここいままでの考古学上の成果から見れば、

（1）「三世紀中葉ころの倭国に^{けい}径百余

歩^ほの大きな高塚式古墳が築かれた

（^と）^と述べている日魏志倭人伝の記載は、^{しん}素直には

認め難いところであり、^{とうてい}到底

（2）まいてや、^{よこあな}横穴式古墳の存在など考え

にくい

といえよう。

よく知られている^ととおり、^{きん}近畿・中

国地方において先ず出現するのは^{たてあな}竪穴式古

墳^{ふん}であり、この後^{のち}おい分^{ぶん}遅れて^{よこあな}横穴式古

墳^{ふん}が現われ、^あそしてそれ以降、^{たてあな}竪穴式古墳

と横穴式古墳とが同時期に共存する。

（^こ）^ここいう推移からみて、普通には、^{たてあな}竪穴式古墳

が先行して作られた、と解釈されている

である。

「玄室」 2219-1/4末 2227? 2,197? 記(出)37,39? 茶26? 2,197? 560? 記(出)37,39? 茶26? 2,197? 560?

紙84P 「隊」 = 隊 292? 719? 26? 記(出)37,39? 茶26? 2,197? 560?

泉國神話^{みくに}ととも、古事記^{こじ}・日本書紀^{にほんしよき}は、共に^{とも}日黄^{ひわう}
 八弥生時代^{やみよひ}のかなり早い時期^{とき}に、^{すて}
 横穴式古墳^{よこあな}が作られていた。
 という情況^{けいさう}を示唆^{しそ}しているといえよう。(「古
 事記」岩波文庫、倉野実司^{くらのじ}校注^{けうしゆ}二六頁^に参照^{さうしゆ})
 おそらく、太伯^{たいはく}の後^{のち}と自称^{しよめい}する倭王^{やま}および
 二小^{にせう}に連なる^{つら}極^{きく}めて限^{かぎ}られた王族^{おうそく}が亡^なくなった
 時^{とき}には、^{その}周^{しう}の時代^{じだい}から連綿^{れんめん}として伝^{つた}わる
 王^{おう}者の礼^{れい}にのつとり、日隊^{ひたい}(^{せんどう}美道^{みどう})の
 奥^{おく}に葬^{ほうむ}ったのであろう。(「春秋左氏伝」僖公二
 五年条^ご参照^{さうしゆ})。荒筋^{あらぎす}の第一編^{だいいちへん}において既述^{きじゆ})
 する^ち置^ちする^ち広間^{ひろま}の内に^{うち}骸^{なきかう}を^{てあつ}手厚^{てあつ}く葬^{ほうむ}った後^{のち}、
 倭人^{やまと}たちは、除道^{じゆどう}(^{せんどう}美道^{みどう})の出口^{でぐち}に^ち千^ち引き^{ひき}の石^{いは}
 を置^おいて離別^{りべつ}したのではなからうか。(「古事記」
 黄泉国^{よみのくに}訪問^{ほうもん}条^{じょう}参照^{さうしゆ})
 一方^{いっぽう}、^な前^{まへ}御^み朝^{あそ}臣^{しん}等^らの^{うち}特^{とく}に許^{ゆる}された者^{もの}達^{たち}は、^堅
 穴式^{あな}の高塚^{たかづか}古墳^{こふん}に葬^{ほうむ}られたの^であろう、
 と推察^{すいさつ}される。(既述^{きじゆ})
 観点^{かんてん}から言^いえは、
 考古学的^{かうこくがく}にまた疑問^{ぎもん}があ

「考古学上」 前頁6行

2,198^P

また、この物語ではとりあえず、
へ卑彌呼の徑百余歩の塚は、横穴式古墳で
あったろう。
と解して述べてゆくことにしたい。

*

合志郡

●それにして、合志の横山山頂の二上状
の山に、その中に三世紀中葉ころ
本堂に、横穴式の墓室が、あつたの
だろうか。
なるほど、今、それを窺い知ることは出来ない。
（）
それたのか、い、それとも現存してゐるが外観上
分らないだけなのか。
など、
因みに述べると、この二上の山頂から少し下つた
あたりの横山の中腹には、あつと後代のもの
であらうか。一つの横穴式古墳があつて、鬼
のいれや古墳と呼はれてゐる。
●また、横山の山裾の丘陵端には、かつて、
全長四〇の、この東側、人まり、した前方後円墳が
あつた。しかしながら、横山古墳と呼は
れるその装飾古墳は、昭和四十四年、九州縦
貫高速道路建設のときに発見され、調査後破壊
されて主体部を失ひ、いまでは、小さな残丘
がみられるだけとなつてしまつた。
●横山古墳山の石室内には、他に類似例の

~~(5) $2190^\circ = 2\frac{2}{3} 15^\circ$~~

少

そうきやくりんによろも

少ない、双脚輪状文（二つの脚をもった輪のよ

うな文様)が描かれていたが、現在、石材は

移転され、他日の復原の日を待っている、と

い
う。
○
「熊本の装飾古墳」
松本雅明、熊本

日日新聞社、一〇八頁参照)

第○回 横山周刃地獄中の横山古墳



さて、**邪馬台国**の都の**外郭城**西北隅のこの

二上の山(横山頂上部)は、清浄に清められ、

生命を得る時を待つばかりとなつた

[illegible]

女陰をあらわす横穴の洞窟の上には、もう

注連縄が張り渡されており、注連縄の処々に結わ

え 付 け ら れ て い る 白 い 四 手 加 風 に よ り て い

腹^{ふく}部^ぶ (後円部)との境界あたり (くび^くれ^れ部^ぶ)に

先として、胸部を成す丘のくびれ部に「梯

子曰天爲梯ハシ以ヨリ立タツてレラレルニ、
この梯ハシの真下マコにニ握カケ

あまのうきはし
天浮橋

え置か水ている

海水で満たされた

大きな器(大甕)

ていた

(記・紀「国生み

条参照)

・なお、

「ウキハシは、普通、多数の舟を並べて上

に板を置いた橋のことであるが、しかしここ

では、口ハシは梯の意味である。梯子

当時、天地の間に梯子をかけて往来する

という観念があり、口ウキハシは、天上

界と地上との間の虚空にかけの意で添えられ

たのであろう

という。(「日本書記」上)日本古典文学大系

岩波書店、ハの頁、注十一参照)

参考次に述べると、

「かぬてより唱えられていた前方部祭壇

説を補強するような考古学上の成果が得ら

れた。

三角縁神獣鏡が数多く出土したことであら

る京都府山城町椿井の椿井大塚山古墳は、

三世紀後半のものとみられ、前方後円墳の全

長は約百七十五メートル、後円部は四段に築かれ

相楽郡

段々状に

相楽郡 100 64? 唱う 1611? 2200-22

紀上 80 注 11 当時 2199 29

「つくりだす」
 本誌一文字本
 土境の発掘 5月22日
 38P
 221P

2.201-1/4
 2201-1/4

はのほか
 著者 紀子247 注20
 カン7412
 指
 キ

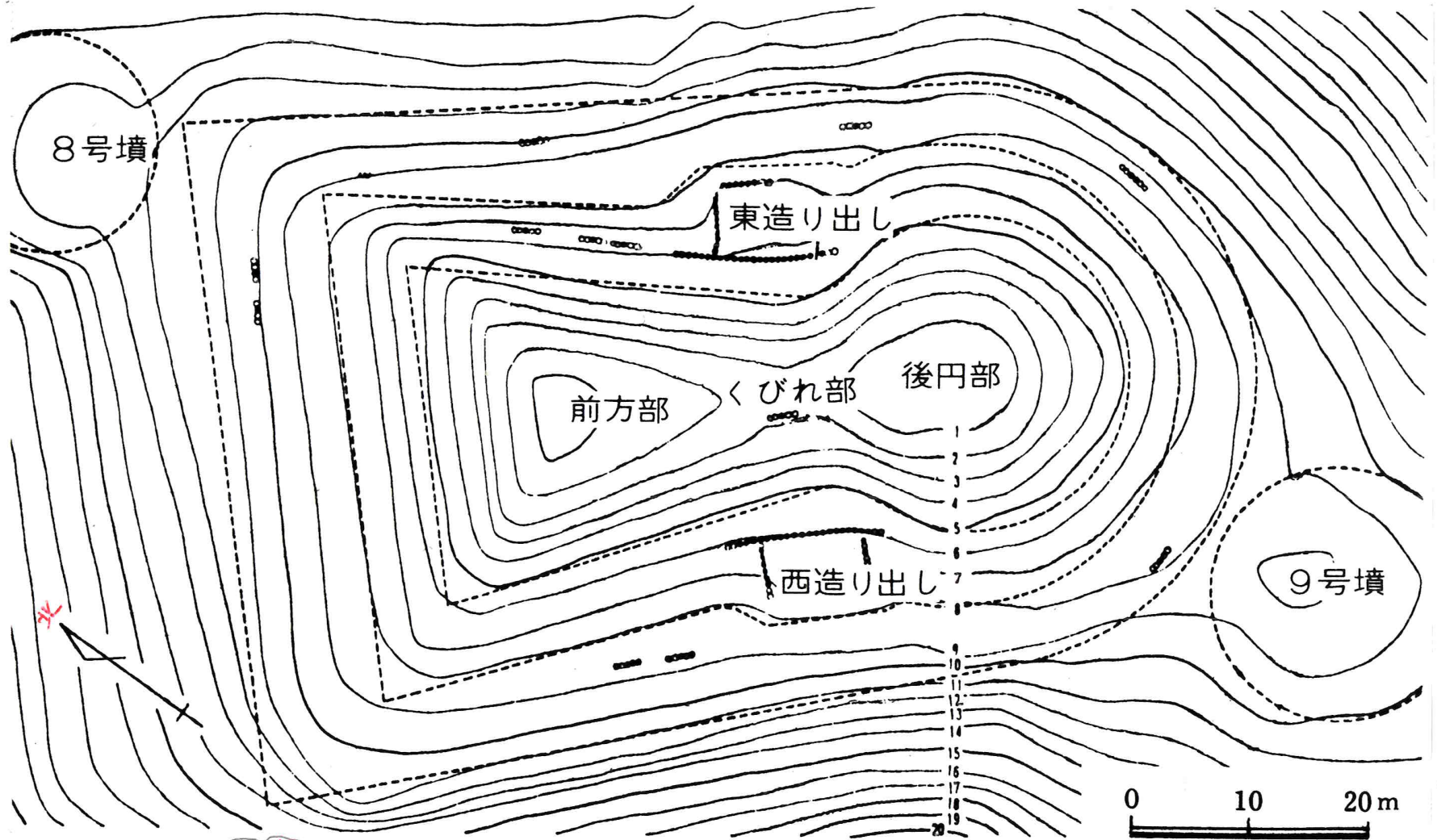
おり、前方部は先端が三味線のバチ形に開く
 構造で二段に築かれてゐる。
 古墳上での祭りの最古例として注目されて
 いる。祭祀遺構は、前方部の二段目で見つ
 かった。
 祭りに使われる器台や高坪などの土器片が
 十数点まとまって出土。墳丘築造後に行な
 祭りの跡とみられる。
 土器は、布留式土器（古墳時代初期）が一
 点のほかは庄内式土器（弥生時代末期）であ
 り、これらの出土土器から、この椿井大塚山
 古墳は箸墓と並び最古級の前方後円墳である
 ことが分かった。
 という。→朝日新聞 平成十年九月二十五日
 付 前方部に祭りの跡（参照）
 ② また、和歌山市の井戸八幡山古墳（埴輪終
 末期ころの横穴式古墳）では、前方後円墳の
 くびれ部の突出部分である口造り出しにお
 いて、祭りが行われたようである。（第315
 7（東・西の）造り出し部分に、円筒形埴

円筒埴輪
 256

2.201^P-2/4

・ 頁の上半分に
大きく掲載
下さい。

北 →
北を入カして下さい



14 第315図

井辺八幡山古墳の墳丘復原図と円筒埴輪の位置

拠「井辺八幡山古墳」

1369

『埴輪』伊達宗泰、保育社、昭和53年3月5日発行、51頁参照。

はい主 土師器 元1782 素焼土器
 2,201-3/4
 大幡山古墳 319m
 2200-1/2 1号
 四角 49 51
 蓋 1089 足つき台
 小鉢 241 高坪

古調査報告、第五冊「一九七二年六月一日発行参照」

輪で方形の区画をつくり、そこから各種の埴輪が出土した。
 東側の造り出しでは、北（前方部寄り）の方形の埴輪状文回家人物埴輪の一行、裸形から又脚輪状文回家人物埴輪の一行、猪埴埴輪へ相撲をとる力士像かの一列、馬猪埴輪の一行といった順に出土し、埴輪以外に大甕、器台、台付壺、高坪などの須恵器が置かれていた。この方形区画の墳丘側にも、人物馬、看などの形象埴輪が立て並べられていた。西側の造り出しでも、東側同様、円筒形埴輪列内側に大甕、器台、壺などの須恵器があり、人物、馬、鳥などの形象埴輪が立てられ、方形区画内には人物、看、家の埴輪や須恵器の器台、小坪付鉢、耳付坪、台付壺、高坪、坪、土師器高坪、壺がならべられていた。
 この地方の埴輪終末期の様相の一端が知られるという。埴輪は伊達宗泰、保育社、五一頁、八幡山古墳、同志社大学文学部考